

自由門 優良賞「わたしのこと」

薬学部薬学科 1年2組 水越 朱音

イチゴジャムになったいちごは、なにをおもうのだろう。

一人暮らしを始めたばかりの頃、わたしはよくイチゴミルクを作っていた。真っ白なホットミルクに、真っ赤なイチゴジャムを溶かしたそれは、ほんのりと薄紅色で、まるで桜の花びらのようだった。

嗅いだことのない風の匂い、慣れない水の味、どこに続くのか知らない道。方言が飛び交う雑踏の中は、わたしがよそ者であると囁かれているかのように思えて、なんだか怖かった。家族が夢に出てくると、起きた後、少しだけさみしかった。実家の周りではまだ咲いているはずの桜が、こちらではわたしの目の前ではらはらと散っていくのを見て、なぜか泣きそうになった。

だから、わたしはイチゴミルクを作っていた。

みずみずしい緑色の葉がきらきらと眩しくなってきた頃、わたしはようやく、こちらで借りているアパートの一室を、自分の部屋だと思えるようになった。必要最低限の家具と、誰の声も聞こえないその部屋を、わたしはどうしても、自分の帰る場所だと思えることができずにいたはずなのに。

乗らなくなって久しい自転車を使うのはなんだか怖くて、行動範囲は狭かったけれど、少しずつ、こちらでの暮らしにも慣れてきて、自分の力でいろいろなことができるようになっていく気がして、嬉しかった。

ふと思いついて、久しぶりに制服に袖を通すと、ぴったりだったはずのスカートが、ゆるゆるになっていた。そういえば、その頃のわたしの毎日の食卓には、節約と手抜きを極めたかのようなメニューばかりが並んでいた。

蝉の声が賑やかになってきた頃、わたしはアトピー性皮膚炎と診断された。顔や体の痒みが酷くて、皮膚がぼろぼろとむけていた。そんな状態の顔で人に会うのは、なんだか気が引けた。大学生になるから、と用意したコスメも、使われないままずっとポーチの中で眠っていた。

皮膚科の先生に処方されて、毎日、朝と夜に薬を塗らなければならなくなった。忙しい朝にそんな時間はなかったから、その日から少し早起きをするようになった。まだ静かな早朝、そっとベランダに出ると、空気はひんやりと気持ちよくて、忙しきで散らかって

た心が整理されていく気がした。疲れて帰って来て、シャワーを浴びた後、丁寧に薬を塗っていると、自分を大切にする、ということが、ほんの少し分かった気がした。

焼き付けるような日差しが和らぎ始めた頃、わたしは初めて自分の誕生日をひとりで迎えた。いつもより、ちょっとだけ夕飯を豪華にしようと思って、オムライスを作った。ケチャップライスはいつも通りだけど、一人暮らしを始めたばかりの頃、ぐちゃぐちゃになってしまっていたオムレツが、その日はきれいにふんわりと作ることができた。

デザートも用意した。夜のスーパーで半額になっていたショートケーキだった。だけど、そのいちごは、とてもすっぱかった。ずっと前に家族と食べたショートケーキのいちごは、とても甘かったはずなのに。ケーキに合わせて淹れておいたインスタントコーヒーも、いつもより渋い気がした。

そういえば、わたしはいつからか、コーヒーをブラックでしか飲まなくなっていた。

だから、わたしはイチゴミルクを作った。

久しぶりに飲むと、ほんの少し、甘すぎる気がしたけれど、やさしい味にほっとした。

いちごは、ショートケーキの上に乗れなくても、こんなに美味しいんだ。

朝夕が涼しくなってきた頃、わたしは数年ぶりに自転車に乗った。おそろおそろ漕ぎ出してみると、風を切るのが心地よくて、気が付いたら遠くまで来ていた。せっかくだから、気になっていたお菓子屋さんに寄ってみると、いろいろなお菓子やケーキが、たくさん並んでいた。その中には、ショートケーキだけじゃなくて、わたしの好きなアップルパイもあった。

わたしは、いちごも好きだけど、りんごはもっと好きだ。そのままのりんごも、ジャムになったりんごも、アップルパイになったりんごも、みんな好きだ。

そうだ。わたしは、わたしに、素直でいよう。どこにいても、何をしても、わたしは、わたしのだから。

今度、また自転車に乗って、どこかへ行こう。

#### <講評>

一人暮らしを始めて、あらためて気づく家族のこと食事のこと、自分の健康のことなど新たな暮らしによるストレスや不安が淡々と描かれている。故郷を離れ一人暮らしを始めた多くの学生に共通した新生活への適応について繊細で読者の心に訴えかけるような筆致と巧みな言葉選びで描写されており、大きな希望を抱きながら、一方で慣れない暮らしに一人奮闘している学生らしい姿が彷彿される優れたエッセイに仕上がっている。話の展開では、アトピー性皮膚炎になり治療を受ける過程で自分を大切にする心を取り戻し、いろいろなことが少しずつだけ前に向かって動き始めたことを素直な筆致で表現しており、読者の心に温かいものを残してくれる。筆者は、自然体で生きることが何より大切なことに気づき

未来が開けたと語っているが、奇を衒わない落ち着いた表現が作者の意思の強さをより鮮明に感じさせる。加えて、このエッセイで使われている「イチゴミルク」という言葉は、エッセイ全体を柔らかさと甘さとそして少しの酸っぱさで包み込んでいるようだ。総じて、ユニークな発想で書かれたエッセイであり、若干詩的な表現も諸所に散りばめられており、素直な気持ちで読み進めていくことができる点が高く評価される。

エッセイコンクール審査員／富岡 治明・永田 彰子・吉目木 晴彦・大庭 由子・高田 厚